

幼児の性情の涵養

倉橋惣三

東京女高師保育實習科の卒業生の研究會で、倉橋先生にお話していたら、あらまじです。この夏の講習へおいでになつて、先生のお話の前半をおきよになつた方々へと思ひまして、不充分的の筆記ですがそのまゝ掲載して置きます。(編輯者記)

夏の講習で、性情の涵養の話をして居て途中で倒れましたので、その話が残つてゐるだらうから、今日はそれを聞かせて呉れよの、幹事の希望でありました。それはたしかに残つてゐます。これが、あの先話さうししてゐる原稿です。こころが、あの時は時間も充分豫定されてゐたし、詳しい話をするつもりでしたが、そういふ譯にもいきません。そこで、この原稿の内容をお話するのが主でなくてあの先、さう言ふことを話さうとしてゐたかといふ計畫、即ち筋だけを、内輪話、お茶のみ話の心算で聞いて頂くことにしませう。

○
この夏は、性情といふこと、涵養といふことをお話し、まづ總論はすんだわけであります。あれから、「性情の涵養」といふことについて二つのことをお話するわけであつたのです。即ち、一つは善良なる性情の内容論、各論で、もう一つは涵養といふことを、もう少し實際的に、方法論といふ語弊があるが、實際的にお話するわけであつたのであります。この二つのうち、内容的各論の方は、随分むづかしい問題であります。「善良なる性情の涵養」いふことを、幼稚園でどう取扱つたらいいか、それをたゞ大體論として考へるだけなら何でもないのであります。各論的に列擧するに

こむづかしい。正直に言へば之に對する定論は中々立て得ないのであります。

すつこ以前お茶の水の講堂で、やはり「性情の涵養」についてお話ししたことがある。あの各論は、日本人のもつてゐる本原的な善良さを材料にしてやつて見たのであります。我々が現在の善を考へるものを見るに、儒教により、又佛教により、次に西洋の宗教を倫理學によりてすつこ影響を受けて來てゐるのであります。それをそのまゝ、「善良なる性情の涵養」の標準にしてゆくには、幼稚園には、あまりに高すぎ、深すぎ、分化しすぎてゐる。幼児にはもつこ簡素な善でなければならぬ。その様な、儒教、佛教、西洋宗教、道德思想、の影響なきのない本元のものでなくてはならない。こいふ譯で、即ち古事記さか、萬葉集さか、殊に萬葉にその標準を置かう、こう以前は考へて各論を立てゝ見たのであります。こころが、今年はそれを換へたのでも、又捨てたのでもありませんが、本もこがさうだこいふこを研究するに止めないで、それがもつこ高い善良への向ひ方に就て考へて見たのです。その向ひ方がまたいろいろに見られます。

○

善良への方向として、自然主義的の人は純真であればよいとせう。又ある人は立法的、法律的な方向をこるでせう。又ある人は道德的方向をこるでせう。又もう一つには宗教的方向もこられるでせう。即ち善いこいふ考へ方にはこの四つの方向があるを考へられる譯です。

この内、純真いふこは、私達の如く既に純真を失つた大人から考へるに非常に美しいこに思はれるが、文化價値こいふ方から言へば、これは本もこのまゝに過ぎません。幼児はあれだけの話なのです。しかも又その純真を養はうこ言ふこは、おかしな話であります。幼児の純真はもち前であります。そこでこの自然主義的立場は除けて置いて、次に、さて道德的にすべきか、立法的にすべきか、宗教的にすべきか。この三つの一つを選ぶのは、善良の方向の立て方であり

ます。但し、實際としては、勿論三つが交つてゐるのです。それを考へて方向を分けて見るのです。即ち「この善良さ」の向きを道德的善良さ、宗教的善良さ、立法的善良さのいづれに向けて見るのが幼児の性情涵養として適切かといふことになるのです。

我々が昔から教へられた事は、考へて見るに随分法律的であり功利主義的であつたと思ふ。ところで、この法律的に發展すべき善良さは確かに人生に必要であります。これを幼児期から採用すべきか、即ちその方向への教育が適當であらうか否かといふことは考へる可きであります。法律的に善良、といふことを心理的に考へればこれは寧ろ少年後期、青年前期の訓練にこそ必要なものであり、幼児期にはふさはしくないと言ふことになります。

次に道德的善良さ、これは前の法律的善良さに較べるに劣つたことになつてますが、少年期の教育に適當なものであります。道德的善は惡に對する善であり、善か惡かは心持の方面もありますが、明瞭には行を本體とするところですから、やはり幼児期には早すぎるのであります。

そこでこの話を進めて行きますと、「幼児の性情の善良さ」を發展させてゆくに、宗教的方向が最も適當であらうと思はれるのであります。しかしこれは決して宗教々育をしやうと言ふのでもないし、方法的にも必ずしも教育に宗教をもつて行かうと言ふのでもありません。自然主義的ではなし、法律的形式でもなし道德的でもなし、謂はゞ宗教的善良さへ向けてゆくべきものであらうと言ふのであります。

この考へで各論を立て、行かうと思ふのであります。以下、各論の列べ方だけ話して見ます。

一 素直さ

以前「性情の涵養」を考へた時、各論を「朗らかさ」を以てスタートしました。「朗らかさ」といふのは古代日本人の善良さの最大の本質でありました。しかし、ここまでも自然的價值であります。必ずしも文化價值ではありません。そこでこの度は、宗教的方向への價值から考へて、「すなをさ」を第一に置いて行かうと思ひます。

素直の特質は受容性が豊かであるといふ事であります。即ち何でも外のものを受け取る、うけ入れ得られるのであります。朗らかな人勿論外のものを受け取りますが、あつさりしてゐるのですからここに依る通り過ぎて仕舞つて、拒絶はしないが果して受け取るか否かは不明であります。朗らかだけでは餘り透明で底が無いかも知れません。が「素直」になるを底をもつてゐる、「受けざる」性質が多いのであります。ところでこの受けざる「性質が發展して行く」ことは「宗教的善」への第一基礎になるものであります。

宗教でも信仰と言ふことは、唯受け取るだけのことではありますまい。むしろ受け取るよりこちらから求め縋つてゆくといふ要素が多分にありませう。「信ずべきものを信するだけ」は信仰ではない。未だもたざるものを信するのが信仰だといふ言ひ方もある位で、信仰はアクティブなものであらう。そのアクティブといふことに對しては「素直さ」は大したものではない。しかし先づ以て受け取る、素直に宿す、こいふ方からは宗教的なるものゝ根本性質であります。但し、幼兒にもこの受け取る性質の多少があります。容易に受け取り得るキャラクターと、受け取れない傾向の多いキャラクターがあります。たゞへば勝氣といふのは道徳的や法律的には屢々都合のよい性質であります。勝氣であるからして誤なき生活をする事は多いのであります。しかしこれ位受容性をさまたげる性質はないのであります。宗教的善良さへ發展するこいふところから言へば屢々邪魔になります。すなはち、朗らかでもなし、勝氣でもなし、「素直さ」が必要だと思ふのであります。素直さ、これを充分研究して見様と思つた一つでありました。

ところで、これは、素直さをこりあげる表面の理由ですが、裏の理由も少しあります。今まで教育上「従順」をいふ事位尊ばれた事はありませんでした。殊にフランスの十八、九世紀の教育論には之が非常に重んぜられたのでありますが、この従順論に二つの説き方があります。その一つは教育をして行くに、唯實際上都合がいゝから、さういふ説き方です。つまり従順でないを教育しにくい、困る、おこなしいを大人が骨が折れぬ、さういふ譯であります。そのあらはれこしては、従順を素直さは一致するところがありますが、従ふ、さういふことは必ずしもそれ自身素直さは限らないのであります。容易に従順なるくせの子が、しばしば「受け取る」をいふ事に就いてはおろそかであつたりします、その反對に受容性が豊なるが爲に従順でないところもあるかも知れないのであります。極端な例であります、奴隷はたしかに従順ではあります、受容性があるではありませんか。殊に神様の前に、人間の従順さなきは問題ではないと思ひます。神様から言へば人間が叛くのがむしろいぢらしい位であります。唯人間に、神の心、が受け容れられるか否かにあります。その關係の實際が従順であらうが無からうが、肝要なことは、神の氣持が受容されるか否かにあります。皆さんの好意に對してさへ、それを餘りによく受けるが故に従順でない子供がおります。私共でもあまりにも氣持を受け容れて、従順にゆかぬ事があります。私は手紙をもらひ、それを事務的に取扱ふ時にはすぐに返事を出すのですが、すつと受容してしまひ、返事を出さないふ道德の方へ行かぬところが多いのであります。これは返事をかゝぬ無性を少々ごまかしてゐる言ひわけですがね……。

二 謙遜

「素直さ」の次に、少々言葉が大きくなりますが、「謙遜」をいふことをいひたいのです。

これは、*humble* のものか *humble* のに、謙遜を研究します。一番これを説いてゐるのはキリスト教ではなからうかと思ふ。謙遜 *humble* といふ何かこうむづかしい儒教的な句がありますがそれを道德にしてゆくのでなく、形に、作法にしない、なま／＼しさのまゝで説いてゐるのはキリスト教であらうと思ひます。カーライルは「キリスト教は謙遜の宗教である」と言つてゐます。聖書を見ますとよく判りますが、殊に新約書は、人間が、道德的意味でない謙遜さにごままなれるかが書いてある。この謙遜感 *humble* は、キリスト教の言葉で即ち「負ひめあるもの」を譯してゐます。いつも心持の上で「負ひめ」を感じてゐるのであります。その負債感 *debt* は、今受けてゐるもの、我の受くるに償ひする筈 *debt* の差から起ることで、その差を感じて負ひめの心になるのです。これが道德ならば、借りたものなら返へせといふ義務感であり、勝氣だつたりする *humble* しろ口惜しくもなるかもしれない。借りて濟まない *debt* は生意氣で一體容易に返へせるものではない。唯、このまゝ、率直に受けてしまつて、義理も、口惜しいも、負けん氣も、感じないで、たゞ「あたらざる心」に居る。それが謙遜です。

我々の生活にもこうしたものがあります。義理を重んずる人、感謝する人、又甘んじて靜に負債を背負つてゐられる人、 *humble* のがあります。その、しつこり *humble* しみてゐるのが謙遜であります。ぐうたらであり乍ら胸一ぱいなものもあり、義理がたくて不謙遜なものもあります。道德ならば負債は返せばよいのであります。宗教的には、お返し *repay* します *repay* は言はない。「お返しする」は對等であります。對等 *equal* なることを謙遜して、唯「受けます」と言ふ。「一生御恩を負ひます」と言ふ。之が「當らざる心」 *humble* なるのであります。

與へられた事に對して、三つの態度があると思ふ。一つは當り前だ *humble* といふ考へ、之れは宇宙へ貸してあるんだ *humble* といふ態度で、謙遜の最も反對であります。又一つは返へさう *repay* と思ふ、返へし得る *repay* と思ふ態度で、これは次の「當らざる心」にまでごまやかに切り切らないのであります。第三が即ち、てんで當らない *humble* といふ氣持態度であります。それが謙遜の心状

であります。これをこごもに養つて行かうと言ふのです。

三 感謝、敬

前の謙遜の氣持が第三に進んで、二つになるように考へられます。「當らざる」心を自分につけて考へれば謙遜になります、がむこうへつければこごに他の感じが出て來るのです。

その一つは、「當らないもの」に、こごまでして下さる。「こごいふ様に、心持ちをむこうへもつて行くこ感謝になります。それを、こちらへついている主觀を捨て、むこうへも見つめるこ敬になります。一寸したもつてゆき方によつてこの二つになります。キリスト教は情操的で、感謝的の方になり、觀念的な儒教は敬になつてゐます。われ／＼の子ごもの性情をこごへまでもつて行き度いのであります。

○
受容性といふこご、これはこごもに實に多分にあります。二の謙遜、これもけんそんなまではならないにしてもこごもは少くも我々よりけんそんなであります。こごもがすぐ非常に嬉しくなる、喜び易いこごいふのは、「當らざる心」が底に湛えてゐるからであります。第三の向ふへ即した氣持、これには未だありません、それよりも、こごもに於ては、歡喜といふ状態になります。その歡喜をもし分解してこごまでももつてゆけば、感謝であり敬です。

○
さて、こごでこれを方法の方から考へるにして、私は愛といふものを分解して見たいと思つた。すなはち、「素直さ」は愛さるゝこごによりてのみ養はれます。愛さるゝこごいふこご、愛してやつて愛さるゝ經驗をもたせるのであります。愛し

てやつてこそにも愛さるゝといふ生活過程を経験させるのであります。愛さるゝ人間に於て、素直な受容性が養はるゝのであります。又愛が「當らざる心」を起させるのは當然であります。愛により、つくされ、ゆるされます。殊に、ゆるしに依り「あたざる心」を感じます。即ち謙遜な氣持が起るのであります。愛がこうした感を持つ他に、もう一つ進む愛といふものは、愛を受けてゐる間に、どこかに無限性が感じられます。どこまで？どこから？といふ感、受ける方からゆく無限性の感、これから感謝、敬、へゆくのではあるまいかと思はれます。

○

以上が夏休みの、あの次のお話のたくらみであり、一つの筋なのであります。

「善良なる性情の涵養」がこれで完結か否かは知りません。否、原始的善良さも道德的善良さも説かなければ完全ではありませんまい、しかしこの處が、殊に我々教育者のもつてゐる「善良」への感はこの處が缺けてゐるはしないか思つたのであります。